資料２

第３回休眠預金等活用審議会ワーキンググループの議論の概要

＜2019 年度業務の進捗状況等について＞

- プログラムオフィサー（ＰＯ）は、この制度の成功に関わるくらい重要だ。資金分配団体のＰＯが実行団体をフォローしていく必要があるが、JANPIA には資金分配団体のＰＯが、現場が分かる実行団体に寄り添うよう育成してほしい。実行団体の目線まで下りた伴走支援がないと実行団体はつぶれる可能性さえあると思う。

- 来年度、再来年度と資金分配団体を公募・選定していく中で、日本に資金分配団体を担える候補がそんなに多いとは考えられない状況もある。資金分配団体の集め方も工夫が必要。

- 経験上、助成側から地域団体にメンターをアサインすることは、ボランティアでは非常に難しい。ＰＯの人件費を担保して仕組みを回すのは非常に良い。ＰＯになった方が、それを広くアピールできるような仕組みもあれば、次の人材の発掘に繋がると期待する。地域にネットワークを持つＰＯなら、より有益な支援になるのではないか。

- システムについて、実行団体に採択されたことを誇りにして実行団体自らが広く拡散できるような仕組みを見据えて構築するとよいのではないか。活動や成果を Web 上で誰でも見られるようになれば、より裾野を広げることにも繋がるのではと期待している。

- 東北では大震災以降にソーシャルセクターが育ってきた状況の中で、資金分配団体がないのは重い。不採択の理由を踏まえ団体育成に意識を向けてほしい。また、思い付きレベルで今後の話と思うが、新型の疾病等が発生した時のための仕組みづくりや予防等に休眠預金が使われるのは国民から納得感があるのではないか。

- 資金分配団体等に後から条件を決める場面が出ることは理解できるが、結果を怖がって無用に手かせをはめることなく、団体の勇気や冒険心を尊重し、寄り添って決めることを最優先頂きたい。

- 来年度の資金分配団体は、今年度の採択事業には入っていない分野、空き家とか住宅支援もあるが、課題は多くあるので、新たな課題に取り組む団体が採択されてほしい。休眠預金が、困窮している人たちに届くものになってほしい。

- 2019年度に不採択となった資金分配団体に対しては翌年度に向けフォローをするとの説明だったが、それに比べ不採択となった実行団体へのフォローが足りないように感じた。新たな資金分配団体に漏れた実行団体をつなぐなどのフォローがあると良いと思う。

- 資金分配団体に不採択となった団体のフォローの方向性は非常に大切である一方、１つの団体でいくつも本当にできるか分からないような申請もあったと思うので、休眠預金の趣旨に沿わない団体が入ってこないよう注意する必要。制度の黎明期なので、十分な力を持つ団体が多くない現状で新しいチャレンジャーを資金分配団体を担える団体に育成していく視点も、裾野を広げるうえで必要。

- 専門委員も休眠預金を育てていく意味でイコールパートナーの一員。専門委員が現場に出向いて話を聞かせて頂く機会を検討をお願いしたいと思う。

＜シンボルマークの策定と周知について＞

- ステッカーなどは有効だと思うし、そこにQRコードをつけて、事業の紹介や応募方法などを読み取れるようにすると良いと思う。

- 「休眠預金」も「民間公益活動」もまだ浸透していない言葉である。シンボルマークをきっかけに、調べてみよう、知りたいという形につながっていく工夫をお願いしたい。

- シンボルマークには言葉が添えられる方が良いのか、あるべきなのか、理解してもらうために必要なのか、など、言葉を入れることについては、いろいろ考えてしまうというのが感想。

- 愛称やキャッチフレーズのような休眠預金が連想できるものがあるといいと思う。今まで関心を持っていなかった人にどう届けるかを考える必要がある。

以上